慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	太田俊太郎先生との想い出
Sub Title	
Author	山田, 辰雄(Yamada, Tatsuo)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2009
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.82, No.4 (2009. 4) ,p.193- 195
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特別記事 : 太田俊太郎先生追悼記事
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20090428-0193

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

カ人のオバマ候補が勝利するという、歴史的な年になった。太田さんがご存命であったら、どのようなコメントが聞けたであろうか。大いに心残りなのである。

（二〇〇九・一・三一）

名誉教授　小田英郎

太田俊太郎先生との想い出

太田俊太郎先生が亡くなられてからすでに一年が過ぎようとしている。先生と最初に接したのは、大学院時代藤原守胤先生のアメリカ政治史の授業においてであった。助手として授業に参加され、われわれの報告に耳を傾けておられる太田先生の態度には重みがあった。

太田先生とのお付き合いはそれ以来亡くなられるまで続いた。先生はアメリカ政治（史）の研究者であるが、政治学科では地域研究グループに属し、研究と教育において同じグループの先輩として私はいつも先生に親しくしていただいた。先生はまた石川忠雄先生に私淑されており、石川先生を囲む集いでもたびたび同席させていただいた。その意味で、私は太田先生に対し強い同門意識を持っている。

私の専門領域は中国政治（史）なので、太田俊太郎先生のアメリカ政治研究の全体的評価については他の方に譲りたい。しかし、太田先生にはアメリカ政治に託した

夢があった。その一因は先生がアメリカ建国史を研究された藤原先生の研究会の出身であることに由来している、と私は考えている。アメリカ建国史は、ヨーロッパの旧体制に比べると実に革命的であった。太田先生はそのようなアメリカに魅かれたのだと思う。先生との日常会話のなかからもそのことを読み取ることができた。

一九六〇年代はヴェトナム戦争の時代であった。私はその時期の学生であり、同時代人としてアメリカの政治・外交に批判的にならざるを得なかった。この時代に太田先生が中心となって編集された『アメリカの対外政策』（鹿島研究所出版会、一九七一年）で私も「ジョン・S・サーヴィスの延安報告」と題する論文を書かせていただいた。それは、ヴェトナム戦争を踏まえてアメリカの中国政策を批判したものであった。その時、批判にはやる私に対して、太田先生はそれでもアメリカには強さと惹きつけるものがあるとの趣旨のことを言われた。思い返してみると、そこには太田先生のアメリカ政治に対する理解の深さと愛着があった。

長年にわたる三田での生活において、太田先生と行動を共にする機会がいろいろあった。そのなかでも特筆すべきは法学部の入学試験改革の時であり、それに対する先生の貢献であった。現在の入試制度の原型は十時厳周学部長の時代に作られた。その改革は見事に成功し、法学部の今日の地位を築く上で重要な役割を果した。しかし、入試改革が行われる前の段階で、法学部には改革派と守旧派との尖鋭な対立があった。太田先生は改革派の先頭に立って動揺することなく、私が少し曖昧な態度をとるとよく先生に注意された。先生の入試改革、ひいては現在の法学部の地位の確立に対する貢献は大変大きい。

太田先生、小田英郎先生と私は地域研究グループに属し、石川先生の下で指導を受けていた。われわれ三人は池袋経由で三田に通っていたので、帰宅途中よく雑談をする機会があった。話題は多岐に及んだが、三人は入試改革について意見が一致していた。時には各々が学部の会議などで厳しい意見を述べ、当時常任理事であった石川先生に注意を受けることもあった。あとから聞いたところであるが、この三人を「三田の三田（さんた）」と呼ぶ人がいたそうである。そのような人が「三田の三田」はうるさいということを石川先生に告げると、先生は彼らとて一人前の教授であるから自分から注意を促す必要はないという趣旨のことを述べ、その雑音はわれわれに達することがなかった。

長いお付き合いのなかで、太田先生との想い出は尽きない。最後に先生の秘話を一つだけ記しておく。堀江学部長の時代であったと記憶しているが、堀江先生を中心に政治学科の有志が学部の将来を話し合うために御殿場にある経団連の研修所で一日合宿をした。夜の話し合いも終わり、しばしカラオケを楽しむ時間となった。太田先生のピアノの腕前、西洋古典音楽に対する造詣の深さはよく知られている。その先生が急に演歌を歌い始めたのである。その音程の確かさ、声量の豊かさ、節回しに皆圧倒された。普段は寡黙な先生であるが、意外なところで自らの能力を出し、急に自らの意見を述べて人を驚かすのが先生の好みらしい。

太田先生が病を得て入院されてからお会いすることができなかった。お見舞いに上がろうとすると、いつも謝絶された。それは先生の美学であったのかもしれない。私にとっては、そのことが心残りである。先生の奥様にはいろいろな機会にお会いすることがあった。長女の早苗さんは私の文献購読のクラスの学生であり、長男の明彦君は私の研究会の卒業生である。先生亡き後も、太田家とのお付き合いは続きそうである。

名誉教授　山田辰雄